

2010.8.21 バレエスタジオA i l e 第2回発表会

～Dream～

第2部

BALLET NEO JENESIS ～バレエ新世紀～

作品解説

- 1、*Ballet of the Essence*
- 2、歌の翼に乗って～Song&Ballet～
- 3、*Emotion*
- 4、遙かなる弦の調べ～Featuring Yuki Etoh～



1、 *Ballet of the Essence*

音楽：チャイコフスキー、他

バレエの純粋な幾何学美や機能美。

その要素 (Essence) を抽出し、新しいカタチとして描き出す。

そこには従来のストーリーは存在しない。

在るのは、音と動きに彩られた未来。

◆踊る人◆

これを踊るのは、成人クラスで受講されている方々。

バレエスタジオ Aile における初の成人（複数人による）作品です。

みなさん様々な経緯でエルに来られ、現在は同じクラスでレッスンをされています。

10月末に開催した[成人対象発表会説明会](#)にてお集まり下さり、そこで出演のご意思を表明して下さいました。

その後、[作品解説説明会](#)にて、今回の作品コンセプト解説と衣装選びを行いました。

どうして、何度も説明会を開いたのか？それは、ご納得した上で参加して頂きたかったから。

この作品は既存のものを解体した、ある意味アバンギャルドとも言える作品。

最初はコンセプトに驚かれた方もいらっしゃいましたが、それでも新しいこの試みに取り組んでみよう！

という方向性が固まり無事にご出演者が決定致しました。

◆使った音楽◆

この作品は全部で5つの音楽から成り立っています。

- 1、白鳥の湖・第2幕より 白鳥達の登場（チャイコフスキー）
- 2、パ・ド・カトルのヴァリエーションより（プーニ）
- 3、パ・ド・カトルのヴァリエーションより（プーニ）
- 4、パ・ド・カトルより（プーニ）
- 5、レ・シルフィードより（ショパン）

バレエをご存じの方ならば、この演目がいわゆるベーシックな古典作品であることは一目瞭然でしょう。

ざっとみただけでも、いわゆる有名どころが並んでいるな、という感じです。

有名な古典作品から、音楽要素をまずこのような形で取り出してみたのです。

本来ならば、こんな風に並ぶはずのない音楽たち。

何故ならば、それぞれの作品ごとにストーリーがあり、その文脈の中で奏でられる曲たちばかりだからです。

今回は無謀にも、その有名作品の文脈から音楽を抜き取ってみました。

そう、**Essence** を抽出してみたのです。

物語の文脈から抽出された曲たち。

そして新たなカタチで組みかえられ、一つの作品の中におさまりました。



最初はどことなく座りの悪さがあるかもしれない...と思いました。

でも、素晴らしい音楽は、どんなカタチであれ、そこにあるだけで輝きを放つものです。

「この曲は、この作品のこの部分」

そういう聴き方は、バレエ的には当たり前といえば当たり前なのですが、ある一つの観念の中でしか聴くことのできない閉塞感もあります。

私は今回、その閉じた扉を開いてみたかったのです。

それには音楽解釈と、やや抽象的な概念が必要になります。

だからこそ、大人の視点で考えられる成人の方とともに、「成人作品」としてカタチ作ることになったのです。

◆エピソード◆

既存の古典バレエ作品から取り出した「音楽」

そして「振付」の一部分。

これを新しく組み立て直す際、ポイントになるのは「衣装」

物語の中では、登場人物という設定がかかっているため、衣装はおのずと決まっています。

でも、今回の作品において、それはまったく関係ありません。

例えば、冒頭は有名な白鳥の湖のワンシーンですが、

この作品においては「白鳥」という設定ではないからです。

白鳥達が湖のほとりに出てくるシーン。

この文脈がなくても、音と動きだけで十分に完成された素晴らしいこのシーンは、

あえて「白鳥」という設定をはずしてみることで、

また違った何かが見えてくるのではないか、そんな風に思うのです。

そこで、衣装はみなさんと話し合い、色やかたちを決めました。

作品冒頭の「白鳥」と、コーダ部分にあたる「レ・シルフィード」は通常白い衣装を身につけるため

「バレエ・ブラン（白いバレエ）」と呼ばれています。

そうです、いわゆるバレエ然とした白い幻想的な衣装です。

今回はあえてそれを解体！ということで、白は一切使わずにパステルカラーの衣装で臨みます。



2、歌の翼に乗って ～Song&Ballet～

音楽：メンデルスゾーン、他

かつて、歌とバレエは一つだった。

時代とともに、それぞれに枝葉を分け進化していった。

今、ここで再び出会い、よみがえる命。

21世紀の新しい「Song&Ballet」

かつて、バレエの歴史の中には「オペラバレエ」と呼ばれるものがありました。

現在のように歌とバレエが分離する以前の形式を持つ、18世紀独特のバレエです。

その後、ジャン＝ジョルジュ・ノヴェールという人がバレ・ダクシオン (ballet d'action) を提唱し、これによりバレエはオペラから独立し、現在の形へと姿を変えていきました。

そして今、過去の遺産を新しい形で現代に蘇らせようと試みます。

それがプログラムNo. 2「～歌の翼に乗って～Song&Ballet」です。

ソプラノ歌手の歌声とバレエ。

それらを合わせる今回の試み。

歌ってくださるのはソプラノ歌手の TAKAKO さん。

そしてピアノ伴奏は木下賢治さん。

リアルに生まれる音楽の翼に乗って、エルの生徒が踊ります。

◆踊る人・歌う人◆

この踊りを踊るのは、コラボ作品に参加希望をしたエルの生徒3名。

今回は任意で参加希望者を募りました。生の歌声での踊りはもちろんみんな初めて。

プロの方の歌声を、こんなにも間近で耳にする機会も初めてです。

歌ってくださる TAKAKO さんは、実はエルの生徒さん。

BODY アドベンチャーの講座にいらして下さったのがきっかけで、

私のレッスンを受講して下さるようになりました。

発表会のお話しを持ちかけたとき、是非参加したい！と仰って下さり、

そこからトントンと話が進み、今回の試みが実現したのです。

私が「身体のしくみからバレエを考える」というロジカルなレッスンや

講座を行っていることに共感して下さり、レッスンを受講したいと思われたとのこと。

もし BODY アドベンチャーという講座がなかったら、このご縁もなかったことでしょう。

そう考えると、本当になにか見えない「つながり」というものの存在を感じずにはられないのです。



◆使った音楽◆

コラボ作品の前に TAKAKO さんのソロが1曲。

オペラ「コジ・ファン・トゥッテ」より ～私の愛は岩のようにゆるぎなく～ です。

生徒とのコラボ作品で使う曲は

- ・メンデルスゾーン作曲「歌の翼に」
- ・ショパン作曲「別れの曲」

この2曲です。

今回はピアニストの木下さんにも多大なるご協力を賜り、

「エルオリジナルバージョン」として、2曲を繋ぎ編曲して頂きました。

これらの選曲は、以前 TAKAKO さんと阿部宅で打ち合わせをして決めたもの。

バレエや音楽にまつわる色々なお話をしながらの選曲は、とても新鮮で楽しく有意義な時間でした。

◆エピソード◆

日曜日の午前中や平日の夕方。

レッスン日とは別枠の時間を使い、練習を行っているこの作品。

TAKAKOさんはお忙しい中、子どもたちと合わせるために何度もスタジオに足を運んでくださり、その度に素晴らしい歌声を披露して下さいます。

初めて顔を合わせた日、生徒のみんなはとても緊張していました。

そこで TAKAKO さんは、子どもたちと仲良くなるために色々と工夫をして下さいました。

何度目かの練習の時に行ったのは、後ろから「声を出さずに相手を呼ぶ」、つまり「気」を投げて相手に想いを届ける...という主旨のゲームを行いました。

「これは私たちの間でも稽古でよく行うんですよ」と TAKAKO さん。

初めはちょっと戸惑っていたみんなも、次第に慣れてきた様子。

声を出さないバレエでは、身体が発するエネルギーやパワー、

つまり「気」のような力を共演者に届ける必要がでてきます。

それは「気配」と言ってもよいかもしれません。

そういった気配同士をお互いにぶつけあって、それが融け合った時、

初めて舞台空間の中で作品としてのまとまりがみえてくるのです。

コラボレーションをするということは、お互いが「ただそこにいる」だけではダメなのです。

それぞれの想いが共振しあい、共鳴しあうことで成り立つものなのです。

音楽と踊りとの共鳴。

お互いのエネルギーの融合。

舞台上でしか生まれ得ない特別な瞬間の喜びが、皆様のもとへ届きますように…。



3、 *Emotion*

音楽：谷口武浩

出会ったことは間違いだったのか。

途方もなく惹かれあう、恋。

手紙にしたための、最後の想いの行き先は.....。

それはある日、突然訪れた。出会うはずのない2人の出会い。

奇跡か。運命か。

途方もないくらい惹かれあう、気持ち。突き動かされる衝動。

始めからわかっていた、結ばれない恋だということ。それでも想いは止められない。

出会ったことは間違いだったの？

それとも....。

◆踊る人◆

この作品を踊るのは、成人クラスで受講されている生徒の方、一名。

バレエ歴はわずか2年少々。もちろん舞台に立つのも初めてのこと。

第1回目の発表会のビデオを見てくださり、今回は是非とも何らかの形で参加してみたい、と申し出て下さいました。せっかくの機会。思い切って踊りで参加しませんか？と私が提案。そこから話が進み、今回のご出演となりました。

初めてのバレエ。初めての舞台。

しかも、ソロ。

経験年数から考えて、純粋的なクラシックは難しい。

けれど「表現」の要素が多い作品、つまり演技的な作品ならば...そう考えて生み出した「Emotion」です。

◆使った音楽◆

和太鼓の響き。

地底から湧きあがるようなリズム。

Emotion に使用するのは、なんとバレエでは極めて珍しい「和太鼓」をベースにした音楽。

笛の音と和太鼓の響きが、切ないほど哀しげに美しく時を刻みます。

本当の曲名は「E a r t h」

谷口武浩さんという方が作曲された音楽です。

この音源を見つけたのは、実は私の母。

母が以前旅行に行った先のホテルで、偶然にも開催されていた和太鼓ライブ。

母がそのライブにてCDを購入したのです。



私は初めて耳にする和太鼓の音色に、すっかり魅了されてしまいました。

ああ、この曲で何か作りたいな。

そう思っていたところ、この方のご出演が正式決定。早速、振付に取り掛かりました。

◆エピソード◆

この「Emotion」は、ご出演する方とじっくりと色々な話をし、練り上げていった作品。

初めてということもありましたが、極めて特殊な音楽と和風的な雰囲気になるため、

誰でも受け入れられるバレエではない、と私自身思っていたからです。

見る側であれば、「ああ、こういうものもあるんだな」というふう

ある程度は受けとってもらえるでしょうが、踊るとなると話は別。

作品に感情移入できなければ、踊ることは難しいです。

ましてや、この「Emotion」は演技が重要なポイント。

自分でわからない（あるいは想像できない）感情は、表現することができません。

そのため、作品への理解とストーリーを固めるために、話合う時間を踊りと同じくらい取っていました。

ストーリー展開は、いわば2人の合作。

大筋は私が考案し、そこにディスカッションを重ね、肉付けをしていきました。

二人三脚で取り組んできたこの作品は、今までにない新しい色に染め上げられました。



4、 遙かなる弦の調べ ～Featuring Yuki Etoh～

音楽：江藤有希

美しい楽器が一つ。

その弦の響きに想いを乗せて、遙かなる未来へ運ぶ。

ヴァイオリンとバレエで贈るコンチェルト。

バレエスタジオ*A i l e* featuring 江藤有希

想いよ、どこまでも.....。

ヴァイオリンという世にも美しい楽器。神秘を思わせる流線形の姿。そしてふるえるような弦の音色。今回、ついに実現したヴァイオリンとのコラボレーション。

この作品に登場する音楽は、すべて今回のために江藤さんが書き下ろされた完全オリジナル曲です。

～遙かなる弦の調べ～ は、小さな3つの小品からできています。

I：パレットの響き～音が色になる瞬間

II：ソロ演奏

III：バレエを思考する

I：「パレットの響き～音が色になる瞬間」

◆踊る人◆

この作品を踊るのはAクラスの生徒5名。希望を取り、任意での参加。

オペラコラボと同様に、レッスン時間を別枠で設け、練習を行いました。

この作品はエルでも初の試みの「生徒による振付」の作品です。

自分達らしさ。

それが出せる作品にしよう。

無の状態から何かを作るのは、想像以上に大変です。まずは取っ掛かりになる「何か」が必要です。

言ってみればトリガー（引き金）。

あちらこちらに散らばっているトリガーを見つけ出し、あるいは捕まえて、

最終的にトリガーを引くまでの作業が「創作」と言えるかもしれません。

彼女たちは、今回その難題に挑みました。

まず、トリガーになったのは、やはり「音楽」です。

◆使った音楽◆

江藤有希オリジナル～「in D」

「D」というのはコード名。

Dのコードで進行する長調の曲。



もう一つの候補曲「in Am」と、どちらにしようか話し合い、彼女たちが「in D」を選択しました。

この曲の特徴はリズム感のある音運びと、カントリー調とも言えるフォーク感が漂う風合い。単音の旋律から、徐々に重なってくる音の層。音符がひとつ、またひとつと少しずつ重なり合って真っ白なキャンバスに色が描かれていくような...まるで「色が見える」音楽です。全体的に明るく快活なメロディーは踊り手の心も明るくします。これは、まさにそんな曲。踊るみんなが最初に抱いたイメージは「華やか」「春」「花」など、どれもカラフルで明るい感じ。そのイメージが振付にも反映されてゆき、最終的なタイトルにも結びついていったのです。

◆エピソード◆

・音選び・振付・タイトル作成・衣装

作品創りにおけるこの一連の流れは、すべて出演生徒5名によって行われました。私のアドバイスなども少しはあったものの、それはみんなの話し合いの進行役を務めたに過ぎません。

先入観の何もない、まっさらな状態から音楽を聴き、それに振付、つまり動きを乗せていく工程は、でこぼこ道をみんなで均しながら進んでいくかのよう。迷い考えながらも、着実に一歩ずつ進んで行ったと思います。

一粒、また一粒とヴァイオリンから零れ落ちる音の粒が、いつしか色に変わり自分たちは、その「色になった音」を体現した存在であるような...それがこの作品に対する彼女たちの共通のイメージ。その時、奏でられる音はその瞬間だけのもの。そして踊りも然り。

その瞬間は二度と来ない。だからこそ、輝くのです。舞台上で次々と生まれる音と、その音と戯れるように踊る喜びを全身で感じ、舞台いっぱいに表示してもらいたい、そう願います。

Ⅱ：青い夜のワルツ

こちらも江藤有希さん作曲。ヴァイオリンソロ演奏曲、「青い夜のワルツ」。

弦を弾く軽やかで切なげな、三拍子のリズム。それは月が青々と輝く夜、心赴くままに1人ワルツのステップを踏むような、自由な心が羽ばたく寂しさと喜びがまじり合った刹那。

高音と低音とのバランス、それが躍動感となって曲に物語を作り出しています。聴く人によって、その物語はさまざまな情景へとかたちを変えてゆくことでしょう。



Ⅲ：バレエを思考する

何もない空間。静寂と、闇。

ここは、何処？

還りたいのは、過去。進みたいのは、未来。本当に……？

◆踊る人◆

この作品を踊るのは、私、阿部純子です。

「音をその場で生み出してくれる人がいる。」

その場で演奏した音。音が生まれるのは「今」の瞬間。

過去にそこにあった音でもなければ、未来に生まれ出る音でもない。

今、ここに在る瞬間。

そういうリアルタイム性が生み出せるのは、生演奏の極意。

バレエという行為、もっと言うと踊るという行為を突き詰めて考えていくと音楽と出会った喜びや、

たわむれる心地よさ、音とダイレクトに繋がる「瞬間」の喜びが

自分の内側から溢れてくることなんじゃないか、そう思ったのです。

「バレエを思考する」時、色々な角度から眺めることができるけれど、

「踊る」という根源的なところに帰着するならば、それは瞬間に生まれる音との出会いの喜びなのではないか。

そこから今回の「バレエを思考する」というコンセプトが生まれました。

◆使った音楽◆

こちらも江藤有希オリジナル。書き下ろしによる作品。

この曲は、目の前に穏やかな風景が広がるような長調の曲。

ゆったりとしたリズムから繰り出される音は、森の中の小道をゆくようでもあり、海辺に佇むようでもあり、そこにいつまでも漂っていたくなるような気持ち良さに溢れています。

途中、テンポが変わり早足のリズムへ。

高揚した気持ちが、私に丘を駆け上らせるように、鼓動の高鳴りにも似た躍動が、

私の足を前へ前へと運んでくれます。

そうして、一気にラストへ。

喜びの込み上げた心は、刹那の渦を巻き、小さな竜巻を起こします。

弾きこすられる弦と弓が、叫ぶように終わりを告げると辺りには音の余韻だけが、

微かに熱を持ってゆらりと漂っているのです。

「風景のある曲を書きたい」

江藤さんが、かつてそう仰って書かれたこの曲。

私には、確かに風景が見えたのです。



◆エピソード◆

リアルタイムに私の目の前に広がる音楽の持つ景色を
振付ですくい取っていくこと。そしてそれを感じる喜びを表現すること。
それが私なりの「バレエを思考する」です。
まず、この音楽風景を活かすには、どうすればよいかと考えました。

音と出会った瞬間を鮮明に浮き立たせるために、
「音が無い」状態、つまり「無音」という状態を作ってみてはどうか？そう考えました。

踊りとは音楽に乗せて動くもの。
しかし、その音楽との出会いの瞬間を、一層色濃いものにするためにあえて「無音」で踊る。
そう、今回、私は「無音」で踊ります。

ほんの短い時間ですが、その静寂は恐ろしいほどに張りつめています。
合同練習の時に、初めてみんなの前で披露して感じた緊張感。
その時「無音」の恐ろしさを初めて体感しました。

静寂の中で圧縮された空気が、自分の体を貫くような感覚。
それでいて、私に突き刺さった空気の緊張感をいつまでも味わっていたくなるような、不思議な気持ち。

その後、音が流れてきたときの安堵感。でも、まだ疑う。
本当にこれは「現実」？

ようやく音の現実を認識したとき、悦びが背骨を駆け上ってくる。
音と一緒になれた嬉しさ。
探し求めていた「何か」を見つけた嬉しさ。
それは「無音」という状態があるからこそ、くっきりと浮かび上がるのです。

何もない空間。
それは、「現在」

右手に過去を抱いて、左手に未来を描いても「今」を生きなければ、
その両手はただ空（くう）をつかむだけ。

禅問答のような、あるいは哲学のような「思考」の淵に立って、
無謀な表現を試みているのかもしれないな、とちょっと思ってみる。

でも仕方ない。
これが私なりの「バレエを思考する」ということだから。

